

男性の生きにくさ、シンドさを読みとく

大学時代、周りの男子学生が卒業するとみんな就職していく様子に違和感を持ったことが、「男性学」を研究するきっかけになったと語る武蔵大学社会学部助教田中俊之さん。男性はどのようにしてそんな「働く」と「当然のよう」に求められるのでしょいか。日頃から社会、企業での男性のあり方について見直しを訴える田中さんのお考えを、7月1日に住吉会館ルピナスで行なわれた講演でお伺いしました。

女も大変だけれど、男もシンドイんだ！

男性中心型労働慣行はシンドイ

女性の活躍、女性の社会進出を考えると、結婚、出産、育児にかかる女性の負担を軽減し、ずっと働き続けられる環境を整備することはとても大切なことです。そのため、内閣府の第四次男女共同参画基本計画にも「男性中心型労働慣行等を変革し、職場、地域、家

庭等あらゆる場面における施策を充実させる」ことが明記されています。ここに「男性中心型労働慣行」とは、1日8時間、週40時間が「最低限」の労働時間であり、それ以上を「普通」とみなす慣行である、と私は解釈しています。「この定義されるのは、女性にとっても同様に、男性にとってもシンドイことです。

男性学とは「男性問題」、つまり

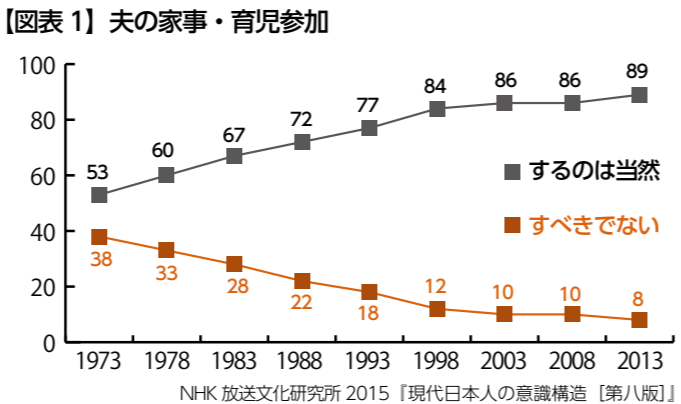
男性が男性であるがゆえに抱える悩み、葛藤を対象にした学問です。働きすぎ、自殺、過労死、平日昼間問題男性が昼間に歩みづらいうこと、地域に居場所がないなどの問題が挙げられますが、いずれも男性が働きすぎることと良しとする社会によって引き起こされる問題と言えます。

働きすぎや過労死は言うに及ば

なのに、近所に知り合いがおらず、預け先もなかったので仕方なく私は子どもを大学に連れていき、抱っこしながらゼミの講義をしました。私は大学教員なので「こういう融通がききます。しかし会社員には不可能でしょう。まず会社が許さないし、社会でも受け入れられません。平日昼間に男性が地元の駅周辺を歩いていたら周囲から不審な目で見られます。子どもを連れて昼間、公園に行けば、居心地の悪い思いをしないといけない。男性はいつも会社に行き、ずっと働き続けるのが当たり前だと扱われているから、そのまじりかたに悩まれている。

まじめな男性ほど追い込まれている

「男性も家事・育児参加への日本人の意識は73年当時」するの「は当然」とすべきでない」が拮抗していたのに対して、13年には9割近くが「するのは当然」と回答し、大きく変化しています(図表1)。しかし男性が働きすぎざる状態が改善されないのに、家事・育児の分担も求められるのは男性が「つらすぎます。まじめな男性ほど両方こなそうと頑張ってしまう、追い込まれている状態です。」



見栄ではなくプライドを

男性はプライドがあるから無理してしまつてよく言われます。男は強くなければいけない、苦痛を乗り越えないといけないと考えてしまいがちです。しかし私に言わせればそれはプライドではなくて見栄です。

見栄というのは、他人との比較で自分の上下を決めることです。男性は小さなころから競争するよ

男ならあたりまえではない

う、あおられて育てられます。勝ち抜き競争の最たるものが「野球選手」ですが、息子に野球選手になれとけしかける親はいつかいます。息子が野球選手を夢にすると喜びます。しかし高校、大学へと進んでも息子がまだ言い続けていると、「いつまでも夢を見るな」と怒り出します。これは奇妙な話です。それなら最初から息子をけしかけなければいい。高度成長期なら、競

争の意味がありました。常に上昇し続けていたから、競争することでさらに上を目指しました。しかし日本は今、低成長なのに、上に行けという習慣だけが残っているのは問題です。見栄は今の社会では何の価値もないのです。

見栄の代わりに、真の意味の「プライド」を持つべきです。人と比べず、自分が欲しいものを求める。自分のしたい仕事をやる。試行錯誤してやり方を確立したら、誇りを持って、曲げずにいるようにしてほしい。「弱くはいけない」という周囲のすりこみを気にしていたら、男性はどんどん追い込まれて、うつ病になりかねません。プライドを持って、自分なりの価値観で行動しましょう。

仕事だけが人生じゃない もっと自分を大切に

「社会人」という言葉は英語には存在せず、敢えてあてはめると「会社員(Office Worker)」とほぼ同義になります。しかし会社で働くだけが社会人ではありません。社会人は職業領域、地域領域、家庭領域、個人領域の4つのバランスをとった

Profile

田中 俊之 (TOSHIYUKI TANAKA)
武蔵大学社会学部助教

1975年、東京都生まれ。博士(社会学)。社会学・男性学・キャリア教育論を主な研究分野とする。「日本では“男”であること“働く”ということの結びつきがあまりにも強すぎる」と警鐘を鳴らしている男性学の第一人者。著書に『男性学の新展開』青弓社、『男がっらいよー絶望の時代の希望の男性学』KADOKAWA、『〈40男〉はなぜ嫌われるか』イースト新書、『男が働かない、いいじゃないか!』講談社+α新書

